

近世社会の思惟構造と明治維新——研究史の状況と展望によせて——

奈良 勝司

はじめに

二〇一八年は、明治維新一五〇年とされる年にあたる。もちろんそれは、この一連の大変革の総体をとりわけ一八六八年に焦点化するという、ある種の限定を条件に成り立つあくまで一つの解釈だし、また一世紀や半世紀などの機械的な区切りで歴史を振り返ることの根本的な妥当性、という問題もあろう。ただし、そこには意識の集積が生み出す後天的な意義がすでに実体化しており（再帰的に発動する anniversary の力）、また詳しくは行論で論じるように、ポスト高度経済成長社会として「失われた二〇年」とも三〇年とも言われる時を過ごしている現在

の我々の射程から、この近代の始点（近世の帰結）を検討することは十分に意味をもつ。

しかし、この節目を機に明治維新を再検討しようとする試みは、現時点でそれほど盛り上がっているようにはみえない。無論、NHKの大河ドラマは脇においても、関連書籍の刊行は少なくないし、各地の自治体や地域の博物館・史料館等において、ゆかりの人物や事象についての講演会や企画展などが活発に開催されているのは、明治一〇〇年の際にはそれほど目立たなかった新たなアプローチといえよう。だが、国家や社会レベルでの維新の位置づけや内容をめぐる議論・せめぎ合いの動き、またそれとも相即して専門研究者が明治維新そのものに正面から向き合い再定置しようとする動きは、もちろん皆

無ではないにせよ、活発な傾向にあるとはいえない。かつて「明治一〇〇年祭」が官民を巻き込んだ社会問題になったのとは、対照的な事態といえる。

その原因はさまざまに考えられようが、筆者がとりわけ注目したいのが、この五〇年のあいだに歴史を線によって連続的に捉えることの困難が生じたようにみえることである。以下本論では、大枠の戦後史学史、時代史ごとの事情、思想史の側面から、現在存在するように思われる問題状況を素描し、明治維新論を再構築するための若干の展望を描きたい。ただし、このうち一点目、また二点目のうちの幕末史や近代史の状況については別稿で少しく触れたことがあるので、最初に概要を示し、その後、近世史の状況と思想史の成果がこの問題に対して持った意味を考え、筆者の仮説を提示したい。

一 行き詰った発展段階論と時系列の把握

戦後の歴史学は、アカデミズムの範疇ではマルクス主義歴史学を中心に展開したが、その骨格の一つは発展段階論であった。日本の歴史は他の国家と同じくいくつかの段階に分かれ、遅れた状態から進んだ状態へと段階的に発展していくとされた。そしてこの時系列の発展の原

則自体は、他の歴史理論にも共通した。たとえば、一九六〇年代ごろから日本の高度経済成長とそのもとの社会実感を背景に、マルクス主義に對抗する立場をなした近代化理論である。これは、冷戦状況下で西側陣営に属するアジア国家の経済発展を称揚する意味をもったが、イデオロギーは逆ながら、日本の近代を右肩上がりの線として評価する大前提は同じであった。これらは一つの筋道に沿って進行する歴史を描くもので、特に前者の歴史像は「グランドセオリー」と呼ばれ、教条主義に陥る面もあったが、その体系性ゆえ過去と現在だけでなく、未来を描く射程をも含み持っていた。人々は発展段階論に依拠することで、過去を連続的に現在と結びつけ、その先に未来を考えることができたのである。

しかし一九九〇年代に入ると、冷戦終結とバブル崩壊によりこれらの歴史理論は瓦解を余儀なくされる。ソ連の崩壊は、現実との整合性に苦しみながらもなお強い影響力を誇っていたマルクス主義歴史学に致命傷を負わせた。他方で、国内的には世界第二位の経済大国としての地位と自信も大きく揺らいだことで、資本主義版の発展段階論といえる近代化理論も説得力を減じてしまった。冷戦下で東西両陣営を代弁した二つの発展段階論は、同時に歴史観としての機能を失ったのである。

九〇年代以降、明治維新研究は多様化した⁴が、その傾向を二つに大別すれば、個別実証の進展と国民国家批判論の隆盛とみることができる。このうち前者は、歴史学の基本技能でもあり、以前からも存在していた流れであったが、特に幕末政治史分野では、原口清氏が一つの手法を形づくった⁵。これは、「国是」や「国家意思」に向けた秩序形成の模索を軸に、諸勢力の角逐を時期ごとに再現するもので、朝廷研究や対外関係史などの関連分野にも波及し、一つの方法論として定着した。

一方、国民国家批判論の特徴は、維新変革を経て近代に確立する権力の本質が、絶対主義や天皇制といった具体的な政体ではなく、より普遍的な「近代」に見出されたことである。人々を管理・抑圧する力として、露骨な国家権力に加えて、言語や文化・美的感覚などの、日々接するため普段は意識されないが、それゆえ無意識の次元で人々の行動を規定して「国民」の枠に当てはめる、ソフトパワーとしての暴力が見出された。これは、西洋文明そのものを外部からの強大な来襲者とみて、人々のエネルギーをそのもとに回収し、序列化していく怪物的な永続運動と位置づけるものであった。

二つの潮流は、以前とは比べ物にならない水準で、変革の具体像やそこで躍動した個人・組織の実態を明らかに

にした。また、身分制の解体などの制度的な自由と、精神面を含むより巧妙な抑圧が両立する構造を、「国民国家」化の宿痾として提示することに成功した。

他方で、これらはひとつながりの線で明治維新と現在を意味づけ、未来を展望することを困難にもした。原口氏が、恐らくはより適当な明治維新論への還元を念頭に、戦略的に洗練させた個別実証は、世代を経ることでもしる細分化と分野化（カテゴリー化）の傾向を強め、自己目的化しつつある。つまり、①近代を知るには明治維新の理解が必須、②そのためには実態分析の精度を挙げねばならない、という当初の二段階戦略が、前提（①）を欠いたことで奇妙な自立を遂げたのである。

また、国民国家批判論は、西洋近代やその象徴としての国民国家化の問題を指摘した一方で、その力をあまりに普遍的で絶対的と見たために、論者の意思とは裏腹に、この強大な抑圧システムの無敵性を強調してしまった側面が否めない⁶。無論、諦観や服従を説くわけではなく、巧妙な支配装置のからくりとそれへの対峙に力点が置かれるのだが、不都合な真実の暴露と解決への衝動が必ずしも直結しない一般真理（たとえば我々は輸入品の生産現場の過酷な現実を知っても、全ての消費をすぐにフェアトレードに切り替えはしない）をも、消化した議論にはなっていない

い。また、近代化の荒波を被った非西洋地域が、それぞれに豊潤で成熟した伝統社会を持ちながら西洋化に呑み込まれたのに、その西洋近代にどつぷりとつかった現代の我々がいかにしてこの隘路を脱するかの道筋は、個人レベルの倫理の維持と呼びかけといった以上の具体的・体系的な展望が示されているわけではない。旧来の発展段階論が右肩上がりの近代を描いてきたとすれば、国民国家の力学に組み込まれていく近代は、その程度がまだ不徹底な段階からより行き渡った段階へと展開せざるを得ないという意味で、むしろ行き止まりの終末観にも似通った構造となっている。

乱暴にまとめれば、個別実証は、幕末維新のある種のブランド化（時代のもつ意義への本源的問いからの切り離し）を生み、前後の時代との繋がりをも不明瞭化してしまった。国民国家批判論は、逆に日本の近代化を逃れ得ぬ否定的完成形態Ⅱディストピアへの階梯とみることで、明治維新から現代にいたる折々の過程を、その時代に生きる人々の主体的な営為に即したかたちで、前向きに（建設的に）位置づける回路を失ってしまった。

かかる事態は、本源的には近代日本を一五〇年のスパンで考える際に直面する、特有の困難に起因するように思われる。発展段階論は、課題（マルクス主義）をみるか

達成（近代化理論）をみるかの差はあれ、一定の成長線のもとに近代の歴史を捉えた。しかるに、九〇年代以降の現実とは、これまでは西洋の *catch up* に寄与した日本社会の特質が、いまや逆に社会の停滞要因となっていることを示唆する。しかし旧来の理論では、一つの同じ特性が時期によつて異なるベクトルへ向かう要因が、うまく説明できないのである。軍事的な発展（膨張）としての戦前、経済的なリベンジの戦後高度経済成長の二つとはともかく、その後の長期停滞と閉塞感（しかし比較史的、数値的にはいまでも世界屈指の経済規模と生活水準をもたっている）をも含めた一五〇年の歩みを、近代の始まり方（明治維新）がもった構造の展開として理解する試みは、大きな壁に直面したといえる。

二 近世史の「自立」とその構造的課題

以上、社会背景をふまえた史学史の素描から、明治維新論の置かれた状況を概観した。では、個別実証が時期区分としての幕末維新史の自立を、国民国家批判論が普遍的近代化の立場から明治維新を外在的に説明したのだとすれば、近世史研究のこの間の動向は、明治維新論やその問題構造とどのように関わるのだろうか。

まず、戦前には皇国史観が、明治維新を王政復古とみなす立場から、江戸時代を武士による権力篡奪の逸脱期と捉えた。また、マルクス主義歴史学でも、歴史の発展段階を社会矛盾の蓄積とその解消という構図で捉えたため、近世は一貫して未発達でいびつな克服対象とされ続けた。とりわけマルクス主義においては、未来の革命を担う変革主体の動向に焦点が置かれ、権力が農民など被支配者への収奪をくり返したことが、矛盾を蓄積させて変革のエネルギーを準備したと展望された。

こうした近世の暗黒視は、一九八〇年代ごろから大きく変化し始める。その要因の一端は、六〇年代ごろに隆盛を極めた近代化理論の影響にあり、高度経済成長が定着するなかで、それまでは世界の発展に後れを取った足枷の主要因とされてきた鎖国が肯定的に再評価されるなど、近世＝停滞イメージの見直しが進むようになった。近世はもともと西ヨーロッパの歴史理解には存在しなかった独自の時代区分で、それゆえ *premodern* などとして近代に従属する前史とみなされる傾向が強かったのだが、むしろこれを *early modern* として積極的に位置づけ直す機運が強くなったのである。⁷⁾

一方で、一九八〇年代ごろにはマルクス主義歴史学の内部からも、近世の統治や社会の再評価が本格化する。

それまで、あくまで領主層による収奪の強化と抵抗の激化による矛盾の蓄積という文脈で理解されてきた、農民やその居住地域たる村落の実態に関して、権力と被支配者層の関係を一方的な抑圧ではなく、一定の合意と協調という観点から捉え直し、村落統治をそれなりに合理的ゆえに定着した、一つのシステムとして積極的に評価する動きが有力化するのである。村落は、人口と面積の両面で近世社会の基盤をなしており、その実態は社会構造を象徴的に浮き彫りにするものであったが、当時は佐々木潤之介氏が提唱した、いわゆる豪農―半プロ理解にもとづく「世直し状況」論が大きな影響力を有していた。⁸⁾ その議論の核を本稿との関係で簡単にまとめれば、近世前期に自立し村落を構成する基本単位となった小農が、近世後期になると経済格差により豪農と半プロレタリアートに階層分解を起こし、後者の不満が変革のエネルギーとなって一九世紀に幕藩体制を揺るがす打ちこわしの続発に繋がっていくというものであった。

これは、近代化理論による上からの変革の準備とスムーズな近代化という維新前夜の理解に対抗して、マルクス主義の王道に沿うかたちで、あくまで搾取される被支配階級の側に社会変革のエネルギーを見出し、維新に繋げようとしたものであった。しかし、当初は佐々木説

を受け継ぐ立場にあった深谷克己氏は、後述の朝尾氏の国家論などを受けとめるなかで、次第に収奪の強化と矛盾の拡大よりは、ある程度の自治権をゆだねて統治を代行させる権力側との協調を前提に、「百姓成立」の語に象徴される、家や村落共同体の持続的維持のメカニズムを描き出すことに力点を移していった。⁹⁾

こうした動きは、高度成長やそれに付随する環境破壊の弊害が前景化して農村の要素が保存対象として再発見されるなかで、生活史や民俗学の成果とも響き合い定着していく。江戸時代は、壮大な矛盾の蓄積過程から、支配者と被支配者のあいだの一定の協働・相互依存にもとづき、高度に発達した生存システムが相対的な安定を形づくった「天下泰平」の世へと、大きく位置づけが転回した。当該期がみなバラ色に塗り替えられたわけではなく、厳然たる権力関係も引き続き注視はされたが、それでも総体としては、旧来の暗黒視からむしろ高評価の対象へと、大胆な再定義が進んだといえる。¹⁰⁾

しかし、ここで注意しておかねばならないのは、こうした近世像の転換は、明治維新論とのつながりを断つなかで進んだということである。近世社会を「公儀」の独自のあり方にもとづく合意と協調の体制と捉え直したのは朝尾直弘氏だが、後に諸方面でこのテーゼに沿った実

態分析が進む前提として、朝尾氏が「近世史の自立」を訴えていたことは重要な意味をもつ。¹¹⁾つまり、近代の前座というお決まりの大前提をいったん離れ、近世をそれ自体独立した一己の世界として把握し直す段階を経てこそ、史料に即した具体的な史実から当該期の実態と独自の世界観、社会構造を再現しつつ、近代化論にも回収されない独自の近世像は描き得たのである。

こうした事情は、近世史研究が獲得した大きな成果を、明治維新論の刷新になかなか繋げられないという問題を生み出した。お互いどこまで自覚的であったかは別にして、このような近世史で進んだ統治↓生存システムの観点からの社会の再評価と、西洋人が桃源郷とみた伝統社会¹²⁾が外から到来した寧猛な西洋近代によって暴力的に解体、作り変えられていくという、外在的な国民国家批判論の明治維新理解は、近代批判を持続させつつ近世を【前近代↓独立した成熟世界】へと読み替えた点で響き合う。そして上記の戦略によって、近世社会が一つの持続可能な世界であったという大前提のもとに、各領域・分野ごとに実態分析が進展したことは、ある意味で幕末維新史における原口氏の方法論の浸透がもたらしたのと同じ、時代の自足化を生んだ。実態分析の進展ゆえに、近世史と幕末史のあいだには、論旨展開上の溝もま

た生じたのである。近世社会の「構造」と幕末変革の「状況」は、お互いいかなるかたちで内在的に繋がったのか。幕末史と近世史は、自立し成熟したがゆえに、一周回った課題をも我々に突きつけることになった。

三 思想史における主体把握とその意味

では、社会論や村落論との関連で、近世思想史は近代への展望をいかに描いてきたのか。その系譜を網羅的に紹介することは筆者の手に余るが、ここでは自前の問題意識に即し、丸山眞男氏と安丸良夫氏の研究から、大まかな理解のスケッチを提示することとしたい。

マルクス主義歴史学（唯物史観）が重視しなかった人々の思考の型に、近代を担う市民的主体の可能性を見出したのが丸山眞男氏であった。丸山氏は「思惟様式」という概念を用いて、抑圧的な封建体制下で自由な自我をもたなかった人々が、やがて政治社会を操作対象と置き直し、また欲望を肯定することで自立した個人に成長していく回路を、荻生徂徠から本居宣長の国学への展開として描いてみせた。¹³これは、もともと近世の体制教学であった朱子学が徐々に機能不全に陥るなか、その殻を内側から破り自由で独立した（西洋型市民に対応する）主

体が立ち上がってくるという構図であった。

この丸山テーゼは、古典化したがゆえに広範な反応を引き起こしたが、民衆の生活倫理の分析から課題にアプローチしたのが安丸良夫氏である。安丸氏は、頂点思想家を中心とする既存の思想史では無視されるか、封建遺制の象徴で克服対象とされた民衆の生活倫理を、村落指導者層が生み出した通俗道德として再定義し、一八世紀末以降を、この通俗道德が村落に広く普及していく時期と位置づけた。¹⁴通俗道德は、勤勉・儉約・正直・孝行などの徳目を内面化したものである。理念的には幕藩体制の外に出る想像力をもたず、維新変革の際も後期水戸学や国学が用意した公定ナシヨナリズムの下に序列化されたが、他方では日本の近代化を基底から支えたエネルギーの淵源でもあったとして、民衆が自ら自身を定める自立性に変革の可能性が見出された。発想の目新しさやスマートさではなく、現実に社会を支えた規範の力を重視し、また変革にも保守にも機能する両義性を見出す姿勢は、リアリズムに満ちたものであった。

筆者の問題関心との絡みで通俗道德論が興味深いのは、それが一部の頂点思想家の思考を繋ぎ合わせる手法とは異なり、社会思想的に、現実に各地で機能した村落秩序への関わりを想定し得る広がりをもつ点であるが、さ

らにいえば、空間論として、一定の範囲内に作用した強力な力学の構図も見通せることである。勤勉・儉約・正直・孝行の内面化は、それが不在の状態よりも農村での絶対的労働量を底上げするという意味において、過酷な経済状況に対して労働集約的なたちで対処する志向といえるが、それは変容する経済的・社会的状況下で、村落共同体の単位をあくまで守り抜くという発想の被拘束性を大前提に、初めて成り立つものであった点は重要である。つまり、村落という共同体の範囲を不動の条件に、その一員であるという点を事実上のアイデンティティにもつ人々が、自我の前提を守るために個人単位で課した義務だったのでもあり、各々の内面から立ち上がった価値との対話ではなく、現に生活する環境やそのもとでの人々の関係性の力学が、いわば逆流入するかたちで個人の内側に結晶化したものであった¹⁵。

そして、通俗道徳をこうした立体的な関係性の秩序とみれば、それは何も村落のみに限られるものではなく、空間（領域）や階層（身分）によって無数に分節化された全ての共同体において、つまり社会のあらゆる面で機能する力学であった¹⁶。また、共同体は重層的なものでもあり、大名領国は城下町と無数の村落という共同体に、村落は無数の家という共同体の集積から成り立つ、入れ子

状の構造をなしていた。このように、領域（ヨコ）と身分（タテ）の相関のもと立体的に（ルービックキューブのように）隣り合う無数の共同体が、入れ子構造による重層性にも規定されるかたちで濃密な相互関係を織りなすなか、人々は「領民」意識や「職分」「持分」意識によって大まかな自己規定を、その内部の自らが直接帰属する小共同体への寄与のあり方によって、具体的な自己規定をなしていたと考えられる。その意味で、通俗道徳は普遍的な近世の維持概念であった。

四 明治維新の構造と影響をどう考えるか

それでは、かかる構造をなした世界は、ウェスタン・インパクトにいかなる反応をみせたのか。国民国家批判論の成果をふまえつつも、明治維新を世界各地で進行した国民国家化の一例として過度に一般化してしまうことなく、その普遍と特殊の相関の位相を体系的に掴むためには、前述の近世史研究の成果を受けとめるかたちで、この問いに向き合うことが不可欠となる。換言すれば、国民国家化の普遍的な圧力を前に、近世社会の構造とそこでの人々の意識の有り様は、いかなる運動に転化し、その後の展開のなかで、社会と人々にどのような作

用をもたらしたのか、を考えねばならない。最後にこの点から、明治維新の位置づけをスケッチしたい。

日本では、ウェスタン・インパクトを武人政権が受けとめた点に特徴があった。それは、戦国時代が凍結されて戒厳令が日常化したような「兵営国家」であり、剥き出しの暴力は安定秩序のもとで儀礼としての「武威」となった。⁽¹⁸⁾「武威」は支配の正当性の核に残り、幕末に「外圧」を被った際、人々の受け止め方を大きく規定した。ただし、これを単に二世紀半ぶりに武が解凍されたとみるのは、本質論による単純化が過ぎる。そこで以下では、武や「武威」の一般イメージを踏み出して、それが統治に関わる空間秩序としていかなる構造に転移したのかという、派生の仕方に視野を広げよう。

その際注目すべきが、徳川吉宗の治世がもった意味である。⁽¹⁹⁾彼は徳川綱吉や新井白石の儒教政治を否定し、鷹狩りを復活させるなど武人政権の原点に拘った。⁽²⁰⁾三者が活躍した一七世紀後半から一八世紀前半は、戦国時代の余韻が薄らぎ、大幅な人口増加や新田開発による生産力増大、「小農」自立と「走り」の抑止、そのもとの村請制の施行という、一七世紀に進んだ大規模な変動が、落ち着き安定した時期にあたる。吉宗はこの「泰平」の社会を、儒教でも仏教でもなく、改めて武人の論理で律

したわけだが、そのことは列島に成立した共同体の輪郭を強化して、その内部を強靱なバランス調整の力学で覆うこととなった。なぜなら、儒教や仏教などの人間を個人単位で内面から規定する理念を否定し、頼もしくも空虚な「武威」を淵源に、正当性を内在的には問われない「法」による支配を拡充したことは、ともかく社会を安定的に廻すというプラクティカルな結果主義を全面化させたからである。そしてそこでは、統治の具体的単位となる各共同体の持続と、それを担保する内部の調和の力学が、最優先されざるを得ないからである。

武家諸法度では「法」を「理」に優先させていたが、その法も絶対ではなかった。吉宗の年貢増徴策（これは商品経済が発展するなかで、あくまで村落の共同体単位を基盤に赤字を解消しようとした結果である）によって激増した百姓一揆が、禁止されながらもしばしば首謀者の命と引き換えに要求を実現させ、質地の受け戻し慣行が、法令による制限がありながら根強く持続したのも、共同体の維持が否定し得ない正当性をもった証左である。「武威」の原則は結果的に法度の支配を整備したが、共同体の維持運営とそこでのバランス調整は、さらに根幹的な優先原理であり続けたのである。

共同体の連鎖とその持続を基軸におく統治は、しかし

大前提として、「天下」の外縁を「武威」が保っていることを必要とした。バランス調整が貫徹する共同体の連鎖という近世社会の構造は、限定された大枠の空間の内部分において、その諸所を細分化するという形態においてこそ初めて安定し得たからである。ならば、「武威」は各地方や階層レベルの共同体維持に関してはその本来の姿を随分変えていたが、それらをマクロな範囲で保全する大本の外縁を形づくる機能においては、やはりその本来の性質に貫かれていたというべきだろう。

そして重要なことは、ウェスタン・インパクトはこの外縁における「武威」の働きへの根本的な挑戦であり、それゆえ間接的には、あらゆる共同体やその構成員の自我や存続を、危機に陥れたということである。張力を基礎とするバランス調整の連鎖は、大枠たる「天下」の強制的な固定を前提に成り立つものであり²²（範囲や外殻が不明では、調整の基準が策定しえない）、それゆえ後者の動揺は、近世社会の根幹を揺るがさざるを得なかった。幕末の攘夷論が単なる外国船打ち払い政策として切り捨てられない、極めて根深い願望であり続けたのは、ナショナリズムの力という一般的説明に加えて、かかる関係性によっていたとみなければならぬ。

ならば、幕末に活躍した「志士」は、一般の人々のそ

れよりも拡大させた想像力を武器に、「天下」の外殻を守る武を直接支える貢献主体へと自我を置き換え、そのために既存の共同体の秩序を相対化し脱した者といえる²³。一方で、大多数の共同体にとどまった人々にとって本当に深刻だったのは、幕末の政治変動ではなく、維新期に地域を呑み込んだ行政区画の激変や身分解体、徴兵制などの社会変動であった。これは維新官僚となったかつての「志士」が、「武威」の毀損を防げなかったことに対する強烈な屈辱感と挽回願望²⁴から、急激な国力の集約と底上げを目指し、徹底した国土の中央集権化と均質化を推し進めた顕れであった。この過程で生じた既存の共同体の劇的な解体は、その構成員にとっては、領域や階層の解体のみならずアイデンティティの土台の破壊も意味し、それゆえ彼らを自我の危機に陥れた。

突然自立した個人にはなれない人々は、なんらかの私たちがかつての共同体の代替物を見出し、流動化した自我を支える必要がある。私見では、民権運動期にできた無数の結社²⁵、民衆宗教、家父長制にもとづく近代的家制度、後には会社も、みなこの要請と無縁ではない。それは、学制の整備や御真影などを通した上からのナショナリズム、また通俗道德の強化や立身出世といった下からの対応ではカバーし切れない、中間共同体の機能をあ

らたな形で補填・獲得するものであった。

ならば、結社や会社の運営方針や構成員の機能性・流動性は、みな〈紐付き〉になってしまふ。自我を人質にとられた人々は、共同体への過剰な奉仕を内面化し、共同体は硬直化と状況適応を行き来しつつ、理念以上に存続を自己目的化する。⁽²⁶⁾ 少なくとも、個人の自我にもとづき、共同体や環境を選択可能と割り切れる主体は多くなかろう。そしてこれらは、旧共同体の代替である以上、根本的には一番の外縁にある「日本」に従属し、その一部分として存在するという関係に沿わざるを得ない。近代の民衆宗教が中期以降にその世界観や組織としての独立性を国家に回収されがちだったのは、恐らく本質的には以上に述べた問題構造による。そして、再編された共同体の連鎖は、最強神話を核にもつ「武威」奪還の国家目標のもと、西洋に半世紀先駆けた総力戦の回路として機能し、最初は軍事面で、次に経済面で相当な「達成」を得たのではないか。他方で、それらに敗れたポスト総力戦の時代に、あらたな哲学や方法論、最強神話以外の国家観を見出せずに混乱を極めている原因も、一つの構造とそのままでの運動（力学）がもたらした帰結としての整合的に理解できるのではないか。しかしこれらの仮説の妥当性は、今後の検証課題である。⁽²⁷⁾

注

- (1) 個別事象ではなく全体像を論じたものでは、青山忠正『明治維新を読みなおす』（清文堂出版、二〇一七年）、三谷博『維新史再考』（NHK出版、二〇一七年）、荻部直『維新革命』への道（新潮社、二〇一七年）など。
- (2) 拙稿「明治維新論の現状と課題」（『歴史評論』第 八二二号、二〇一七年）。同「明治維新論の再構築に向けて」（『現代思想』二〇一八年度六月臨時増刊号）。
- (3) 原口氏の研究については、原口清著作集編集委員会編『原口清著作集』一―五（岩田書院、二〇〇七―二〇〇九年）にまとめられている。
- (4) 西川長夫『国民国家論の射程』（柏書房、一九九八年）ほか。
- (5) この点については、宮地正人氏による指摘（『通史の方法』名著刊行会、二〇一〇年、一〇八―一〇九、二七五頁など）もあわせて参照されたい。
- (6) これは見方を変えれば、作為や欺瞞が少なからぬ人々にそうと知れながら、生まれ浸透していく契機と力をどう考えるかという、命題にも絡んでくる。
- (7) 最近のものでは、中公新書編集部編『日本史の論点』（中公新書、二〇一八年）の近世の時代の記述（大石学氏執筆）が、この観点に立っている。

- (8) 佐々木潤之介『幕末社会論』（塙書房、一九六九年）、同『世直し』（岩波新書、一九七九年）など。
- (9) 深谷克己『百姓一揆の歴史的構造』（校倉書房、一九七九年）、同『百姓成立』（塙書房、一九九三年）など。
- (10) 村落分析を核とするこうした構造的な理解について、わかりやすくまとめたものとして、大藤修『近世村人のライフサイクル』（山川出版社、二〇〇三年）、水本邦彦『徳川社会論の視座』（敬文舎、二〇一三年）、渡辺尚志『百姓の力』（柏書房、二〇〇八年）、同『近世百姓の底力』（敬文舎、二〇一三年）などを参照。
- (11) 朝尾直弘「日本近世史の自立」、『日本史研究』第八一号、一九六五年。
- (12) 渡辺京二『逝きし世の面影』（平凡社、二〇〇五年。初出は葦書房、一九九八年）。
- (13) 丸山眞男『日本政治思想史研究』（東京大学出版会、一九五二年）。
- (14) 安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』（青木書店、一九七四年）。
- (15) この点につき、白川部達夫氏は、「人びとの主体的な営み」が「つきつめられることはまれで、人びとはあいまいな認識のまま、周囲の關係に配慮してことをおさめ」「たいていは主体をつらぬいて生きるよりは、關係を生きる」と象徴的な表現で指摘している（『近世の百姓世界』吉川弘文館、一九九九年）。
- (16) 笠谷和比古氏が提唱する「持分」意識（『近世武家社会の政治構造』吉川弘文館、一九九三年）も、この側面に関わる概念であろう。また、藤田覚『泰平のしくみ』（岩波書店、二〇一二年）も参照。
- (17) 前田勉『近世日本の儒学と兵学』（ベリかん社、一九九六年）など。
- (18) 池内敏『大君外交と「武威」』（名古屋大学出版会、二〇〇六年）など。
- (19) 吉宗政権の全般的な施策については、古典的な研究テーマだが、さしあたり大石学『徳川吉宗』（山川出版社、二〇一二年）が読みやすくまとまっている。
- (20) この間の諸施策の特質と移り変わりを鋭く指摘したもののとして、渡辺浩「礼」「御武威」「雅び」——徳川政権の儀礼と儒学——（笠谷和比古編『国際シンポジウム第22集 公家と武家——その比較文明的的研究』国際日本文化研究センター、二〇〇四年）。また対照的な將軍を検討したまとまった著作として、深井雅海『綱吉と吉宗』（吉川弘文館、二〇一二年）を参照。
- (21) 白川部前掲書。
- (22) この点に関する視座から海保青陵の経世論を読み直したもののとして、拙稿「海保青陵と近世後期の世界

観」(『2018 第二屆台灣与東亜近代史青年學者學術研討会』會議論文) 国立政治大学台湾史研究所、二〇一八年)を参照。

(23) この点に関し、丹波国馬路村の「郷土」集団や新選組を事例に具体的に検討したものととして、拙稿「人見・中川両苗と新選組——幕末における二つの「郷土」集団」(立命館史資料センター編・発行『立命館創立者生誕一五〇年記念 中川小十郎研究論文・図録集』二〇一七年)、同「人見・中川両苗と近世・幕末社会」(『立命館史資料センター紀要』創刊号、二〇一八年)を参照。

(24) この心性が生じる世界観の理念的説明については、前掲拙稿「明治維新論の再構築に向けて」を参照。

(25) 民権結社が近世に人々が属していた共同体Ⅱ(袋)の代替機能を果たした点については、松沢裕作『自由民権運動』(岩波新書、二〇一六年)が示唆的である。

(26) 山本七平『「空気」の研究』(文芸春秋、一九七七年)。

(27) 本稿ではその性格と紙幅の関係上、具体的な分析や史料の紹介は行わなかったが、以上の点に関する筆者の現時点での見解と具体的な考察は、拙著『明治維新をとらえ直す』(有志舎、二〇一八年)で展開した。

付記 本稿は、日本学術振興会の科学研究費助成事業(基盤研究(C))における「幕末維新期における「公議」の研究」の成果の一部である。

また、本稿における研究史の把握の一部については、二〇一八年度立命館大学大学院の今西一ゼミでの議論に多くを学んだ。ただし、その整理や評価の仕方の責任は、もちろんすべて筆者にある。

(立命館大学助教)